

『 最後は意欲化 』

かつて、「荒れる中学校」問題が社会的にも注視された時期がありました。全国どこの中学校においても、大なり小なり生徒の問題行動への対応に大変苦慮していました。1980年（昭和55年）から1990年代半ば（平成7年）あたりではなかったかと押さえています（ただし、これ以降もそのような状況にあった学校はあります）。

私も38年間の教職人生の中で、一度だけ中学校に勤務したことがありました。昭和62年度から平成6年度までの8年間です。勤務した中学校は、いわゆる「教育困難校」であったろうと押さえています。とりわけ、前半の4年間は、様々な生徒指導上の問題が多発し、その対応に追われました。その中でも、大きな荒れの波が2回ありました。1回目は昭和63年度。2回目が平成3年度です。学校が“荒れている”時は、おおよそ次のような状況が見られました。

まず、学校教育の中核である授業が成立しない教科が出てきます。問題傾向の強い生徒は、仲間に認められたい欲求が強く、その端的な表現として、教員に逆らったり、露骨な邪魔をしたりします。このことは、まじめな生徒に対しては、力の誇示であり威嚇にもつながりました。授業時間ずっと寝ている生徒もいました。正常な授業からはかなりかけ離れた状態が見られました。

授業は、教員にとっては本分ですから、そこをダメにされたということは、その教員の存在意義が著しく損なわれ、心身に大きなダメージを負うことになります。時には、その苦しさや辛さに耐え切れずに休む教員も出ます。そうしますと、穴が開いた授業を埋めるために、他の教員にさらに負荷がかかります。

また、校舎の窓ガラスを割る、壁を蹴って穴をあける等の校舎破損行為が多発します。火災報知機もいたずらで頻りに作動させます。2回目の大荒れの時は、トイレが破壊されました。確か校内2か所のトイレは、便器も個室も完全に破壊されてしまったと記憶しています。廊下で火遊び行為をされたことがあり、とうとう警察を要請した際、現場検証された警察の方が「よくここまで壊したものだ」と、呆れていました。

校舎内外でたばこの吸い殻が見つかります（朝や放課後、当番を決めて、ひばさみとバケツを持って吸い殻を拾いました）。加えて、空き時間の校内巡視には、コールドスプレーとへらと袋を用意しました。廊下に吐き捨てられてくっついたガムにコールドスプレーをかけて固めて、へらで剥ぎ取りました。へこまされた廊下照明のスイッチも、しばしば直しました。

授業離脱する生徒もいました。そんな時は、職員室に居る教員が校内を探し回ります。トイレでたむろしていることが多かったです。「教室に戻るぞ」と声をかけると、素直に戻る時もありますが、イライラしている時などは、「うっせい。おもしろくねえ。かまうな」など、反抗します。こうなると、チャイムが鳴るまで、その生徒達とつき合うことになります（何とか、コミュニケーションを続けるのです）。結果、その教員の空き時間は潰れます。

給食の時間も悲惨でした。この中学校は、全生徒と全教員が、大食堂で食べます。配膳や生徒の管理という点で合理的かつ効率的ではありましたが、荒れている時はあだになります。荒れる上級生が、これ見よがしに奇声を上げたりパンを投げ合ったりして、なかば無法地帯状態でした（もちろん、その都度指導はしているのですが、問題行動が先行します）。そんな様子を下級生が見ているのです。良い影響があるわけがないです。

辛い、明らかな対教師暴力はなかったと記憶していますが、威嚇行為はかなりありました。多くの教員は身の危険を感じていたと思います。そして、教員としての誇りをずたずたにされ、徒勞感と無力感が漂い、どんどん疲弊していきます。毎日が、とても辛かったと思います。

私自身も、この中学校に赴任してからの3年間は、生徒の問題行動に振り回され、有効な指導がなかなかできず、自信を失い「もうだめか・・・」というところまで追いつめられましたが、何とか踏み止まり、開き直り、少し手ごたえをつかみかけるところまでできていました。2回目の大きな荒れの年度（赴任4年目）は、私にとってはいくつかの幸運とちょっとした自己意識改革が相まって、それほど心身のダメージはなく、むしろ1年を通して、気迫を持って生徒と向き合うことができました。

事が起きれば、普段は温厚な私が、相当な気迫で生徒に迫りますので、声にも表情にもある程度すごみがありました（これは自分で思っているだけです）。1年間、毎日、臨戦態勢をつくっていました。ですから、問題事象に遭遇すると、条件反射的にちょっとすごみのある大きな声を出してしまうわけです。

ただ、この大声は、まずその場を鎮めることがねらいで、具体的な指導は、当該生徒からじっくり話を聴くことから始めました。決して、頭ごなしに、その生徒の否定から入ることはしませんでした。

残念ながら、平成3年度は、十分な改善が図られることなく終わりました。荒れの主力であった3年生が卒業したことにより、平成4年度は、当初から「これから良くなるかもしれない」という雰囲気を感じました。何より生徒たちの多くが、「もう、あんな状態になってほしくない」という気持ちを持っていたと思います。ただ、一部の3年生は、まだ荒れの余韻が残っていました。

早々に、給食時間の問題行動だったか、火災報知機のいたずらだったかは忘れましたが、看過できない問題事象が発生しました。私は、緊急全校集会の実施を上司に具申し許可をいただきました。この年度から、校長先生が代わっていました。

緊急全校集会を5時間目冒頭に実施することになりました。その直前に、私は、校長先生に呼ばれました。「どんな感じで話しますか？」「最後は、意欲化が大事ですよ」

もちろん、私も、“事実の説明→その行為の意味やその行為に対する考えを伝える→「よし。頑張るぞ」という気持ちを持たせて終わる”というイメージは持っていました。おそらく、この数日の私の様子から、新しい校長先生は、感情的かつ説教的な内容で、最後は抽象的な叱咤激励で話が終わるのではと、心配されたのだと思います。その校長先生は、「どんな時でも、最後は生徒に意欲を持たせるような話が大事です」と穏やかに話されました。このお話から、私は、「どのようにして、生徒に意欲を持ってもらうか」「これから、頑張るぞ!」という気持ちになってくれるかということにより焦点を絞って話を組み立てました。

この校長先生からは、「受容」「傾聴」「共感」の大事さと有効性も学びました。そして、「生徒指導」という営みの肝を学び、自分なりに少しは会得できたと思っています。

これらのことが、その後の教員人生に大きな影響を与えました。まさに、ターニングポイントでした。実にシンプルな表現である「最後は意欲化」という考えは、以後の全ての教育活動に活かしました。もちろん、保護者対応においても。そして、子どもの指導上でも、教員の仕事をすすめる上でも、大きな拠り所（たいそうな表現ですが“理念”にも）となりました。

教員12年目にして（これが遅いのか早いのかはわかりませんが）、絶対的な“拠り所”を獲得できたことは、私にとって実に幸運なことでした。